

いからぶつ倒れたって私にとって何ごともない。ついでに警察役所等々もぶつ潰れた方がいいのだが、なにも花見の席にまで「資本主義ぶつ倒せ」というような野暮な歌をうたわなくつてもいいと私はイヤになった。

こうなるとスチルネルではないが、まことに共産主義の諸君は「憑かれた人間」である。それも自分だけが憑かれているのならその人の自由であるが、やかましく騒ぎ立てて、人も講中に入れようというのだから、迷惑至極である。

まじめな連中、生まじめな連中——彼らは権力をほしがる。人を自由に放任しておいてくれない。まことに迷惑な連中である。右は官公吏から左は共産党の諸君までそうである。

* 虚飾で、無用のものが多い都会、ブルジョア生活くらい虚無を感じさせるものはない。

トルストイの「アンナ・カレーニナ」はそうしたことを教える教科書といていい。あの小説のところどころに点在している百姓の生活の描写くらい私どもの心を静めるものはない。

だから私にも、都会生活はことに虚無感を生む母胎だといったのであった。

* 虚無感は私どもに簡易で、質朴で、勤勉な生活に立ちかえることを教えている。虚無感はまだ私どもに平民の生活に終始することを教える。

〔虚無思想研究〕一九四九年四月号

君もアフランシになりたまえ

* 西村伊作 * 松尾邦之助 * 植村諦 他 * 自由クラブ異人

〔西村伊作——自由人の処世観〕 西村伊作

ならぬ、ということはない何々をしなければならぬ、何をしてはならぬ、ということはないと、私は子供のときから今日まで、それが何ごとについても心に浮ぶ。

ナポレオンの辞書には「成らぬ」という字はないと私の祖父が幼い私に話して聞かせたのを、私は、その意味を、してはならぬのならぬと間違えて記憶したのである。

物を貰ったから、お返しに何か上げなければならぬ。年頃になったから結婚せねばならぬ、親に孝行しなければならぬ。すべての人を愛し、敵をも愛さなければならぬ、善いことをしなければならぬ、悪いことをしてはならぬ、ならぬ、と、ならぬことだけで習慣や道徳に一生しばられてはならぬと私は思っているのであるが、ならぬならぬと思つては、いけないと言つてはならぬ。

旧来の習慣や道徳に従いたいと思つたら、そうしたらよい、従いたくなかつたら、それを破つてもよい。自分の都合のよいようにしたらよい。眼の前の都合がよいことと一生の



● 西村伊作（にしむら・いさく）一八八四〜一九六三

奈良県生まれ。東京、駿河台に創立した文化学院は戦時中も徹底した自由主義を買った。西村家は熊野地方に数千町歩の山林をもつ大地主。父方の叔父大石誠之助の影響を受けて、平民社に出入り、反権力主義的な思想の基盤を形づくる。

長女の高等女学校に進学の際、理想の学校をつくろうと決意し、一九二一年与謝野鉄幹・晶子夫妻らの協力を得て文化学院を創設する。学院は自由で芸術的な校風で知られたが、一部にはモボ、モガの巣窟とされた。戦時下には閉鎖され、西村も不敬罪で投獄されたが、戦後学院は復興し

であり、社会保障制度も皆無に近いのに、国内に充ち満ちた貧者が、生存の脅威に置かれながらも愚かな英雄主義と、拜金根性で保守政党に投票しているといった妙なそして悲惨な国である。

このような祖国に個人の話をして分るはずがない。群族はいても個人はいない。

たまたま、個人として優れ、近代的自我をふりかざした独自のコスモポリートが現れても、日本の封建社会はもちろん、かなり解放された文化人の集団まで、これを「狂人」にし「異端者」扱いにした。辻潤の場合がこれをよく説明している。

個人のない群族の集りである日本の社会で、個人を説き「個人主義」を語ることは危険であり、怖ろしい飛躍である。なんとすれば、こうした説明や思想表現が、たちまち誤解という巨大な壁にぶつかるからである。国家という固定観念の中に溶解している九〇パーセントの日本人は「個人主義」を初めから誤解し、勝手な意味にとっているためウナムノが語るような逆説的なものの言い方を土台理解しないとよりむしろ、そうした理解にならな感覚的な準備を持っていない。

「もしほんとうに大衆に接近したかったら、まず大衆から遠ざかりたまえ……」といったウナムノの言葉を日本の誰が理解するか？ 「自分は個人を中心にしてものを考え、個人主義者であるがゆえに地球の全人類と握手ができる」とたびたび私はいつている。

僕は、自分のことを中途半端にしか知らない友人から、(実は、ほとんど全部の友人がそうであるが)僕のことを、「君のようなアナキストが……」とか「君はアナだから……」といわれるたびにそのレッテルに対して戦慄を感じる。それは、アナキストという言葉に怖れるのではなく、危険思想家だと思われたくない自分の卑怯のゆえでもない。僕の怖れるのは、日本のインテリが考えているアナキズムが僕の考えているものとあまりにも縁遠くかけ離れているからである。

日本人の考えているアナキストは空虚な理想人で、かなり純粋な感情を持つていながら現実に対し無責任極まる人間のことであり、辛辣な批評家でありながら、行動において無力でゼロに等しい人物のことである。独創的で個性の強い人間は他人に迷惑をかける場合が多い。が、その創造力や個性の発揮するものが、万人のためになり、世に益するとき、彼の性格による欠点は微笑をもって許されるものとなる。辻潤の場合はまさにそうである……。

僕には、いわゆる信仰はない。世の中にはさほど偉大な人間もないし僕にとつてはどんな思想でも相対的であつて、それを絶対なものと思わない。もし、誰かに、それでは君のいう相対的な思想を受諾した生き方とは何か？ と訊ねられたら、僕はハッキリ答える。「人間の社会環境が、さまざまな思想を持った自由な個人のために組織が機能を発揮するような世の中を建設しようと思ひ、毎日そのために努力している」と。

だが、僕が、ここで「組織」という字を使ったことには無理があり、そこにひとつの矛盾があると考える人もあろう。組織とは共同体であり、それは、つねに個人の自由を奪うものである。個人と共同体(社会や国家)とはいつても対立関係にあり時に共同体は個人の

文化を紹介し、フランス・ジャポニスムの一端を担った。

戦後二六年ぶりに帰国、読売新聞社の論説副主幹として、在野のグループの評論家として活躍する。アナキズムの思想に共鳴したが、それはあくまでフランスのストア系の哲人アン・リネル風の積極的な諦念の立場に立つ。個の倫理に基づくものであった。

(1) 英国紳士風の吉田茂が戦後に、自身を天皇の臣民としてみずからこう称した。

(2) スペインの優れた文明批評家、哲学者

●個人的な感懐であるが、私は松尾邦之助を通じて辻潤と接することができ、この世界の絶大なる広がりを感じることができた。松尾は、フランス流の本物の哲人倫理をもつていた人で、日本は松尾に対し、まことに無理解であつたと思う。そこで私は引合戦の意を込めて、松尾を中心とする諸氏の著書『日本の哲人』を献じたのだつた。

「革命家は現状の打破という意味で、それを個人的にみれば反逆者でありえ、反逆者はまた社会的にみた場合、革命家以上の革命家であるともいえる。したがってバルビュスのいうキリスト革命(家)説は、キリスト反逆者説と根本において何の相違もない」

「僕はキリストやガンジーは、革命家である前に偉大な反逆者だと思つている。この二人は制度や『組織のてんぶく』を直接の目的にせず、個人の人間の『考え方のてんぶく』に働きかけていた人々である」

「キリストはローマ帝国を無視しなかつたが、それに何のこだわりも持たなかつた。それはガンジーがインド的な愛国者でありながら、人間の『心』、慈悲を説く時、インドや英国に何の関心ももたなかつたことと同様である。

キリストの関心は個人の覚醒であり、人間の救済であり階級や制度や組織

にも働きかけないのはなぜか？」

と訊ねる人々があるが我々は答えていう。「ごもつともな質問である。だが、それに対する僕らの夢は簡単なのだ。段違はいつもなものかの所属物になりたくないからだ」と。

*

個人主義とモンブニテ（世俗性）とは一致しない。

もし君が自由で大胆不敵な感情家たらんとしたら、世俗人になろうとする野心を捨てたまえ、世俗的な有名どもに、自由で大胆な思想の素質がないことを僕はよく知っている。

*

少数者であるという誇り、これはひとつの満足である。だが、この満足感環境を伴っている、甘くしかも辛い満足である。僕は大衆にもてはやされる人々の名譽に何の願望をも抱かない。

よき友となり、数人の仲間から信頼されていふこと、それが、僕にとつて喜びでありそこにだけデリケートな深いものがある。

〔アフランシ〕第20、21号、九五三、四年

「植村 諦他 —— 不愉快文化人コンクール」抄

—— あなたの最も嫌いな有名文化人を三人挙げ、その理由を略記されたし——

北 狂介

①天野貞祐▽吉田ワマン（ワマンとはカタハラ痛し）内閣の文部大臣を勤めて

いる男だからおよそ低脳ぶりは多言を要しない。カントが嘆くだろうよ、吉田のオッサンに与える書でも書くがいい。

小川正夫

②賀川豊彦▽常代の義人をもって任じているが、キリストには及びもつかない宣伝上手な小山師。

③羽仁五郎▽ソ連の提灯持ちも大概にするがいい。狸さん、共産主義という美名にまんまと欺されている。狸精神と実証精神は一致せず。

①大山郁夫▽大衆に阿諛する典型人。自分の人気にこだわるがゆえに大衆から最も遠い人物。

松尾邦之助

②武者小路実篤▽自分の俗悪を非凡に見せようとする偽善者。日本で有名になるべく美事にできている。

③羽仁五郎▽何ゆえに共産黨員にならぬのか？ 穴にいて時々首を出すねずみ、を思い出す。

植村 諦

日本の知識人の八割くらいまでは僕は嫌いです。彼らは自分というものがなく、いつも知識の奴隷となり、受売り、切売り、拡声機の役をつとめてにすぎません。そこから知識の娼婦性が生れます。反動の時代が来れば反動理論の指導者面をし、進歩の時代が来れば進歩の先駆者面をし、形勢非となればいずこともなく消えていく。日本の知識人は時代の娼婦です。

①林 房雄、②羽仁五郎、③赤岩 榮

志成らずして、田舎町の呉服商に婿養子となった父は、せめて子供の一人が邦家の助けになるような人物にと願いをこめ、次男を邦之助と名づけたのだろう」

「長兄も私も魚釣りが好きで、自然の静寂に包まれながら微かな浮きの動きや釣糸の感触を楽しんだが、次男の邦之助の漁法は小川を堰止めて水をかい出し、フナもドジョウも残らず手に入れるやり方だった。彼の自然愛はおとなになつてからも、池を造り、鯉を放ち、庭木を植え、自然にはたらきかける能動的な自然愛だった」

「兄は彼の思想とは裏腹に淋しがりやだった。人間の現実から隔離した孤独に耐えられるような性格ではなかった。裏切りのない愛情や信頼がほしかった。一匹の雑犬をあんなに可愛がっていたことにもほつきり現われている」

〔松尾正路「兄・邦之助のこと」個々復刻版〕一九八四・一〇・二

●「アフランシ」について

「アフランシ」は、松尾邦之助を中心とするだべりんぐグループ「自由クラブ」の会報である。創刊号にみる会員数は、石川三四郎、西村伊作、大沢正道、辻一、村松正俊ら百人あまり。それらの異人（同人に非ず）に対し、本文上段に掲げたアンケータを募集した。

いかにも毒舌家の松尾らしい企画であるが、アフランシの系譜にある人々が、いつたいたどのような人物を嫌いとすることを、同時にアフランシなる者の位置を窺うことができる資料である。（玉）

【主な人物紹介】

天野貞祐 哲学者、教育家。第三次吉田内閣文部大臣
賀川豊彦 牧師、社会運動家
羽仁五郎 歴史家、評論家
大山郁夫 政治家。スターリン国際平和賞受賞
花田清輝 評論家、小説家、劇作家
福田恒存 劇作家、演出家、英文学者、評論家

新居 格

①徳富蘇峰先生▽君の顔は蘇峰に似ているよ、といわれるのが理由。

②山本有三氏▽ポーズが多過ぎるので。

副島井智男

①小泉信三▽ 共産主義の批判をする前に、日本の社会保障制度の現状についての常識くらい、具えておいてもらいたい。

②森戸辰男▽ アナーキズムから社会党右派への発展、名誉と地位は発展したが、ヒューマニズムは退歩せざるをえない。

③徳川夢声▽ 七色の声も、天皇制のたいこ持ちに欣喜躍如とふるえる時は、むかむかかと嘔吐しそうになる。

山口健二

①天皇▽ ある雑誌の中で、「天皇こそ日本の代表的な文化人で、平和主義者でござります」と書いてあった。こんな非人間が日本の代表的文化人であり、平和人であるとは、私はじめた日本の風潮は、これは単に

天皇のバカさ加減を笑ってはいられぬから

……これは嫌い以上。

②ジイド▽「自分で、自分が自分を……」およそムダなおしゃべりをまあ根気よく……。「人間の中に永遠に生きているもの」などをさらに永遠化し固定化する反動性。

嫌いですね。もつと早く死んだら、まだ良かったのに。

③大宅壮一、林房雄、マルロオ等々……豚ですね。その時々、何でも構わずより多く、貪り食うドンランな食欲、臭い、与えられた餌に血眼。嫌いですね。

梶田公一

①天皇氏▽ 自分を持つていない良心の稀薄な男。日本人の寄生虫的存在。敗戦後自殺すべきであつたらう。

②斎藤茂吉▽ むかしはともかく、戦時中は戦争を讚美し歌う。戦後も支配階級に媚を売つてやまない。「皇太后陛下かくります」と詠む茂吉、医博だときくが、脳病院

林 房雄 小説家、評論家

赤岩 栄 キリスト教思想家。日本共産党入党

徳富蘇峰 新聞人、文筆家、大日本言論報国会会長。作家徳富蘆花の兄

山本有三 小説家、劇作家

小泉信三 経済学者、社会思想家、随筆家。東宮職参与

森戸辰男 経済学者、政治家。片山内閣文部大臣、広島大学長

徳川夢声 弁士、漫談家、朗読家、随筆家

ジイド フランスの作家

大宅壮一 社会評論家。「マスコミの天皇」の異名をとる

マルロオ フランスの小説家、政治家。ド・ゴール政府文化相

斎藤茂吉 歌人、精神医

山浦貫一 新聞人、政治評論家

佐藤春夫 詩人、小説家

高村光太郎 詩人、彫刻家

中野好夫 英文学者、評論家。平和運動家

石川達三 小説家

宮本顯治 共産党員(89年現在、同党議長)。作家の宮本百合子は妻

山浦貫一

③山浦貫一▽ 一流の政治評論家らしいが、反動陣営の提灯持ちをしている。再軍備を強調するとはもつてのほか。

高橋新吉

①高橋新吉▽ 仏くさいことをいうから。

②佐藤春夫▽ バカヤローだから。

③高村光太郎▽ ツマラヌ詩を書くから。

鴻野 豊

文化人というのは、一応ガクがあつて、それも本をたくさんよんでるというだけで、もつともらしい顔をして仰々しくさわぎたてる人種のことです。そやつたら、わしはどれもこれもみな嫌いだす。理由を聞く方がどないかしとるんやおまへんか。だいたい一緒に焼酎のんだら、わてはアンマ代だけで破産してしまうわ。

誰でもかまへんけど、選ばれた人に光栄あれ！ ①中野好夫、②三島由紀夫、③石川達三

宮本顯治

①宮本顯治、同百合子▽ キザな、貴族趣味の偽善者。

②賀川豊彦▽ ファッショ、デマゴグ、偽善者。

③羽仁五郎▽ エセ社会主義者、偽善者。

田 戸 榮

①田中耕太郎▽ あのもつともらしい偽善者の風貌にはどうしても好感が持てない。

②羽仁五郎▽ 彼に対する批判に関するかぎり、世間一般のそれに同感の意を表する。

③米川正夫▽ 素晴しき翻訳機械、その大量生産能力には感心するがそれだけじゃ仕方がないじゃありませんか。

村松正俊

①羽仁五郎、②向坂逸郎、③古島一雄
いずれも素裸になれない奴。

向 井 孝

①片山 哲、②賀川豊彦、③吉川英治、その他大勢

田中耕太郎 政治家、作家、評論家

判官。最高裁長官

米川正夫 ロシア文学者。日本ロシア文学会会長

向坂逸郎 マルクス経済学者。社会主義協会設立に参加

片山 哲 政治家、弁護士。社会党が第一党のとき、内閣総理大臣に

吉川英治 大衆小説家。「宮本武蔵」(全六巻)等

豊田正子 小説家。生活綴方運動の中で自己の生活を記録

平林たい子 作家。堺利彦に師事

植村 諭 詩人、僧侶。無政府共産党委員長

村松正俊 哲学者、「虚無思想研究」の執筆者の一人

向井 孝 日本で数少ない本格的な非暴力直接行動主義者

行いすましたようなゼスチュアや、多分にそれを売物にすべく計算している企業家的なところ、そして最もオポチュニスト的行為を宗教的にカムフラージュしている点。

大木静雄

- ①天皇ヒロヒト▽人間となり生物学者でありながら、戦争の責任についてはなにもせず、アコガレのマトに安居している非人間性。
- ②牧師赤岩榮▽牧師でコミュニニスト。コミュニニストで牧師である点——宗教と

この人あまりといえどもあまりですな。

「自由クラブ異人——アツフランシスムの宣言」

*まえがき

同類、同人、同族、同胞といったように日本人は徒党や同族の意識でかためられ、国家意識、民族意識しか持ち合せず、最近になってやっと自我だの個人だのがやかましくいわれはじめたのは、この敗戦によって日本人が国家や民族のほこりを失い、急に淋しい個人、あるいは個体としてつつ放され、よりどころを失い、急に駭いて自分

もう同人、同族などという言葉をやめよう。「僕」に似た人はいくらもいる……が、「僕」と同じ人は全宇宙に一人もいない。これくらい確かなことはない。自由クラブの同人という代りに異人、という字を使ったのは「僕」と「君」とは類似した思想の持主かもしれない……が、「僕」は「君」に對し、永久に異人であるからである。

この異人が集っておこがましくも、アツフランシスム (Affranchisme) という新語を作って、この異人どもが抱いている類似した思想の宣言をしようと申し合せた。

Affranchiとはフランス語の解放された奴隷のこともあり、郵税を前納して自由に旅行ができる手紙のことでもあり、また、オスカー・ワイルドのいう魅惑的で初恋を刺戟する「不良」のことでもある。

——宣言——

◇我々アツフランシは、ありとあらゆる公式を蛙の小便のように小馬鹿にする。我々は我我自体の存在だけで足り、自己を護るために公式を必要としない勝利者として生きたいのである。

◇我々は既定の公式や、学説や、神聖化された一切の外部的なもの、の前に自己を卑下しない。が誰よりもいっそう苛酷に自己を分析し、反省し、内観することに努める。

◇我々は公式に頼らない。したがって我々自身自身の生活がどんなものなのか明瞭にそれを判断しえない。我々は日々の生活と呼ぶ行為の上にその身を任せているのだが、それがかなりいいかげんなものだという事を正直に徹底的に了解したいのである。

◇共産主義も、ソシアリズムも、人道主義も、ありとあらゆる主義という主義のすべて

●「自由クラブ」について
このクラブについては、出版人、哲学者大沢正道（本双書第17巻）「土民の思想」の編著者の詳しい追憶があるので、以下に抄録しておこう。

*
「自由クラブ」というなんの変哲もない名前の会が作られ、東京の片隅でささやかな活動を開始したのはそういう「世間といかさまの」時代であ

った。自由クラブとは、この四月に亡くなった松尾邦之助の命名で、松尾の甥の松尾志呂生などは「ずいぶん平凡な名前だなあ」と腐っていた。「自由クラブには無規則の規則と称する規則があった。「自由クラブは何ものにも捉われない、何ものをも尊崇しない、自己の思想の発展のために努力する全き自由の友の会である」というもので、これも松尾の文章である。平凡な会名に比して、無規則の規則という言い方は平凡でない」

「この『何ものにも捉われない』『全き自由』が、自由クラブの旗印であり、また松尾の口癖でもあった。それはマックス・シュティルナーの唯一者の思想に由来するものなのだが、横行するまがいものの自由の仮面を剥ぐ役に立っただけで、『二度とふたたびだまされまい』と決意した純な若者たちにアピールする力をもつていた」

「松尾の評論を載せた『平民新聞』のおなじ紙面の片隅に、『リネル研究会』という見出しで次のような記事

が、センチメンタルなメロドラマによつて我々を特定なワクにはめようとし、どんな神聖面をし、巧妙に微笑してきても、我々はその誘惑の花の持つ強制のトゲを突破る。

◇虚妄な真理に捉われた偽善的社会人は我々を「エゴイスト」と呼び、「小ブル」と呼び、「背徳者」とか「反動」の名称で罵倒するかもしれない。が、我々はただ、このような偽善者の仮面を剥奪し、逆にこの罵倒者を落伍者として考へる。

◇アッフランシは社会と個人が対立する場合、個人を護る。がこれは社会に対して我々が冷淡であつたり、無頓着であるということではない。我々は社会があつての我々でなく、我々個人の自由と、幸福と自己享樂のために、我々の複數であるこの社会を認め、それを利用する立場にいる。

◇アッフランシの個人主義的な考え方は、共同体のために尽きないというような偏狭なものではない。むしろ、その反対であるがゆえに特に個人の権利を重大視するのである。

◇アッフランシはもろもろの「真理」と呼ばれるものを幻影とし否定する。が、この否定は感傷的なそして人生に降参したいわゆる廃残者の否定ではない。我々の否定は、落伍者の無行動や、精神的怠慢を意味せず、逆に生の真剣なる熱愛者として生きんがための、いかえれば生の肯定者としての純粹な認識からくる否定である。それは出発のためであり、絶望者の溺死する終極の深淵ではない。

◇国家だとか、社会だとか、それがよしいかに光輝あるものであろうが、醜惡極まるものであろうが、それをただ生理的必要で生れたものとして認める。だからこそ、我々が、いかに個々に立籠ろうが、我々の生活がつねに時局や政治や、社会に左右されることを否定しない。だが左右されながらも、ただ我々はそうした国家や社会を、自己の尺度でしか見

ない、そして、それゆえ一切の請現象を一時的な、外部的なものとして最大限度を利用する。が、もしそれが自己および自己の複數でありその延長である隣人のために単なる拘束であり、不幸の原因である場合、苛烈な過激な社会批判者としてそれに叛逆する。

◇アッフランシはあきらめた自由に満足する羊群の一匹ではない。我々はひとり歩きを誇る淋しい自由な狼となつて生き、そのような狼が自然にグループを結合することを望み、つねに少数者の誇りを持ち、我々の人格の力で、地味に一步一步、辛抱強く、憑れた隣人の考え方の顛覆に働きかける。

◇アッフランシはアッフランシによつてのみ理解される。

◇アッフランシは、孔孟の教義を日本風に歪めた儒教や、個の自由を美事に葬つた家庭や、集団や群落や徒党意識を高揚した仁義觀や、日本の学者の頭を支配しているカント風の認識や、ヘーゲル風の独断的ロジスムに支配された御用学者の説く一切の善を軽くあしらい、あきらめの自由を、アッフランシの自由によつて置き換へるために積極的行動をづける。

◇我々は神を信じない、けれども神を信する人々を決して蔑まない。黒旗を持ち、赤旗を振る世の「宗教人」に対しても同様である。

◇神がもし我々に快適なものを与えるならば、それを貰おう、だが神のために自己放棄をしない。

◇個体としての我々は運命的に過去とつながっている。したがつて歴史を否定しない。けれども、歴史や伝統が言葉となつて固定し、我々の自由な思索を曲げ、それを妨げる場合、断乎として、それに叛逆する。

が出ている。

『去る五月三日の思想講座に、ある事情で出講できなかった松尾邦之助氏を囲んでアン・リネル研究会を開くことになった。日時、毎月第一、第三日曜、後三時、場所、松尾邦之助宅(世田谷区赤堤町×××)』

『松尾サロン(その頃研究会はこう呼ばれることがあつた)は、ヒツペル酒場ほどではもちろんなかつた。集まつてくる連中の多くはいわゆる破滅型ではなかつたし、それに、松尾サロンは酒場ではなく、松尾の自宅であつた。日本のしきたりからして、個人の家であまり羽目を外すことは当然自戒された。』

『松尾サロン』が松尾の自宅を離れて、あるいは大森近辺の喫茶店や飲屋で、あるいは辻潤の眠る駒込西福寺で、あるいは西村伊作の文化学院の教室で、というように転々と流浪の旅に上つたのは、おそらく集まる顔触れもふえ、松尾個人に迷惑がかりすぎる、という配慮からであつたらう』

『アン・リネル研究会がシュタイナール研究会となり、さらにウナムフヤ辻潤を説いたり、日本を呪つたり、カストリをあおつたりする、松尾サロン』に転じたこのグループが、自由クラブの看板を掲げるにいたつた筋道はあまりはつきりしない。松尾サロンと一九四八年十月の自由クラブの成立までの間には、どうもユネスコという平和運動が狭まつていらしい』

『自由クラブは結成早々の一九四八年十月二十四日、「自由クラブ叢書」第一号を発行した』

『自由クラブ叢書』は一号で沈没したが、自由クラブの思想宣言を發しようという試みは、「アッフランシスムの宣言」として結実した。この思想宣言の形態もまた松尾らしくフランス風であつた。それは起承転結のとのつた宣言文ではなく、クラブ員がそれぞれ想を練つてこしらへたアフォリズム的な短文を持ち寄り、それらを取捨選択してまとめあげたのである』

〔大沢正道「自由クラブの時代」黒の手帖一九七五・九〕

◇人間の歴史はカクカクであるというのならばいい。が、カクカクであらねばならぬと説く人間の歴史の製造者達の言葉を信じない。

◇アップランシにも理想があるとすれば、自己を最大限度に高め、賢明な節度を知った享樂者となり、無偏見なエゴイストとして自己を愛し、その愛が、全人類に通ずることに確信を持つことである。

◇我々は戦争や闘争を人間の本能として結論したくないと同時に、また平和をもひとつの真理として盲信しない。ただ我々が騙されないのは、戦争を倫理化して煽動する政府や、軍閥や、資本家たちの感傷的言語や、彼らの打算でしかない笛や太鼓による誘惑である。

◇アップランシは偉大であらなためにひとつの理想を追うローマンチストでもなく、現実を感傷的に否定する厭人家でもなく、ただひたすらに生き、がために多角に人生を味索し、享樂するリアリストである。

◇アップランシは行動と変化を好み、つねに新しい緊張感を持って生きる。アップランシにとつてはその日、その日が生誕日であり、停滞と倦怠と固定を敵とする。

(自由クラブ) 一九四九年五月

●この後なお松尾サロンが、個の会”の名称をもって継続する。私も個の会に属して、投稿し、集会の折には富山から上京した。会はしばしば兄弟関係にある添田知道さんらの「素面の会」と合同の集会の場をもち、賑やかなことであった。(玉)

では、おれの実践方策を授けよう

*太田典礼・森 敦 *富士正晴 *ト部哲次郎・辻 潤
*武者小路実篤

「太田典礼 × 森 敦 —— 安樂死のススメ」

森 ぜひ太田さんを紹介してくれという人が多いいですよ。それはなんでかといつたら、おれはがんばるだけがんばったんだから、なんとかして死ぬときぐらいは楽に死なせてもらいたいの……ところが、まだ安樂死させてあげることができないわけなんですよ。太田 いや、ところがね、できるんですよ。やり方によっては。

森 できるんですか。ぼくもお願いしたいなあ。

太田 まあ、まだ本論に入らん。(笑) アメリカでやってるでしょう。遺言書みたいなもの。遺言書というのは死んでから有効になる。しかしこれは生きてるときにね。だから、リビング・ウィル」というんで、ウィルとは遺言とも訳されるし、「生者の意思」というふうに統一しようということにしたんですが、そいつを預かるわけですよ。

森 ぼくの遺言を預かってれば。



●太田典礼(おおた・てんれい) 一九〇〇〜八五)

産婦人科医。京都府野田川町生まれ。避妊具「太田リング」の考案者で、「IUD(子宮内挿入式避妊具)」の「アーザー」と呼ばれる。日本尊厳死協会理事長。

代々続いた産科医の家に生まれ、三高を経て九大医学部卒、京大大学院に進み産婦人科を専攻。子宮内避妊具を考案したが、製造販売が禁止された。産児制限、無産者診療運動などに力を入れ、治安維持法で二回検査され、通算四年間獄中生活を送る。一九四七年社会党代議士となり、優生保護法の制定に尽力。

一九七六年、過剰医療を拒否する日本安樂死協会(後日本尊厳死協会と